でてこい、未来のリーダーたち。
四谷大塚の挑戦 5

「合不合判定テスト」で中学受験生を強力にサポート
歴史と実績の四谷大塚の取り組み

名門校合格者に圧倒的な割合を占める「合不合判定テスト」

「未来のリーダーの育成」をめざす四谷大塚は、歴史と伝統をもつ名門塾として名高い。受験生のバイブルといわれる『予習シリーズ』は特に有名だが、もうひとつ、小学六年生を対象とする「合不合判定テスト」も、長い歴史を誇る四谷大塚ならではのプログラムだ。

「合不合判定テスト」に臨む６年生たち。四谷大塚ではほかに、本番さながらのスタイルで行われる「学校別判定テスト」を11月に実施している。

今月三日に実施された「全国統一小学生テスト」が小学三～五年生の、中学受験をまだ考えていない生徒も対象にしている一方、このテストは、名称が示すとおり合格できるか否かの判定を行うもの。首都圏を中心とした国立、私立中学受験を控える小学六年生を対象に、年に六回（予備テスト二回を含む）実施される。二〇〇八年には、七月の予備テストに続いて、九月、一〇月、一一月、一二月に実施。日本最多の受験者数を誇る模試であり、九月実施のテストでは、昨年同様、受験者は二万人を超えた。

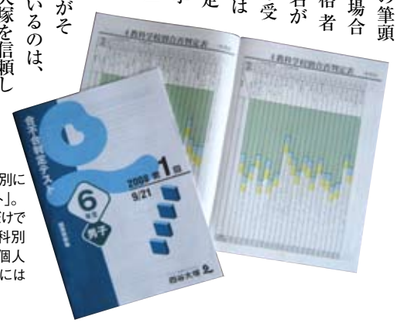
規模もさることながら、「合不合判定テスト」には、他塾の模試には追随できない大きな特徴がある。それは受験者のレベルの高さである。

四谷大塚では例年、「合不合判定テスト」の受験者に、任意で実際の受験結果の追跡調査を徹底的に行っているが、名門校合格者に占める「合不合判定テスト」受験者の割合が極めて高いのである。

開成中学を例にとると、昨年の正規合格者数は三九五名。そのうち「合不合判定テスト」を受験した生徒は二四六名に及び、合格者に占める割合は約六二％。女子の御三家の筆頭といわれる桜蔭中学の場合は、昨年の正規合格者二五九名のうち一六九名が「合不合判定テスト」の受験者で、合格者の割合は約六五％。「合不合判定テスト」は、最難関中学の合格者において、圧倒的な割合を誇っているのだ。

「合不合判定テスト」がそれほどまで支持されているのは、受験者の保護者が四谷大塚を信頼しているからにほかならない。

このテストの結果資料集には、学校別の合格可能性が、八〇％以上、五〇％以上、二〇％以上五〇％未満、そして二〇％未満で色分けされて明記される。記載方法は学校別の棒グラフとなっており、横軸には偏差値が振ってあるので、それぞれの棒グラフに自分の偏差値をあてはめれば、たとえば偏差値六五には何人いて、自分の合格可能性は何パーセントなのかが一目でわかるわけだ。


試験問題も結果資料集も男女別になっている「合不合判定テスト」。結果資料集には合否判定表だけでなく、試験の解答と解説、教科別正答率一覧表も掲載。これと個人成績表が、試験の１週間後には受験生の手元に届く。

また、四谷大塚では、合格発表時の正規合格者に加えて、追加の合格者数についてもほぼ正確に把握している。たとえば開成中学を志望した場合、合格可能性別の偏差値の水準だけでなく、全合格者の人数を視野に入れたうえで、自分が志望者中およそ何番目であるかも一目瞭然なのである。

どこよりも信頼できる判定基準で受験生をサポート

四谷大塚では「絶対的な信用機関」をめざして、合格基準となる偏差値の算出にも万全を期している。管理本部中学情報部部長の岩崎隆義氏は言う。

「前年の結果偏差値をもとにして、今年の『合不合判定テスト』の結果や志望校エントリーといった最新のデータに基づいて偏差値を調査します。偏差値算出の参考とするサンプルは、合格、不合格ともに十分な数を集めています。私たちはこうした努力を通じて、どこよりも信頼できる偏差値、合不合判定基準を示そうとしています」

子供たちがテストを受けている間に開かれる保護者説明会では、繰り返し共感共鳴を求めるべく訴え、テスト受験者の約八割から協力を得ている。この結果を分析していくことで、翌年の学校別偏差値と合不合判定基準の基礎をつくっていく。つまり、四谷大塚が毎年割り振る偏差値は、最難関校受験者の受験結果までを徹底的に把握してきた歴史に裏付けされた数値なのだ。

来年二月の中学受験においては、二月一日が日曜日のため、女子学院をはじめキリスト教系女子中学の入試日が一日ずれることで、併願状況が大幅に変わると予想されている。四谷大塚では、九月二九日時点で、桜蔭と女子学院の併願者が両校受験者数の三〇％を超えるとのデータを公表。緻密で繊細な受験対策を、すでに開始している。

「合不合判定テスト」2008年

第１回	９月 21日（日）
第２回	10月 19日（日）
第３回	11月 16日（日）
第４回	12月 ４日（日）

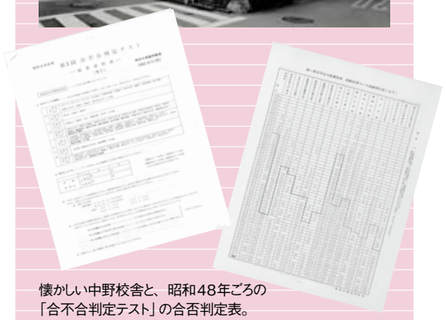
でてこい、未来のリーダーたち。
四谷大塚
www.yotsuyaotsuka.com

半世紀以上にわたり中学受験生を支えてきた四谷大塚の歩み

現在、四谷大塚に通う小学生たちのご両親のなかには、自身も四谷大塚に通った、いわば四谷大塚のOB、OGがたくさんいらっしゃいます。自分が体験した授業やテスト、受験指導への信頼が、わが子の入塾につながっているのです。

四谷大塚の設立は、世の中が落ち着きを取り戻し、「もはや戦後ではない」といわれるようになった1954（昭和29）年のこと。東京の駿台四谷分校と大塚予備校の2会場で行った「日曜教室」が、その始まりです。1959（昭和34）年には、在籍生が増えたため会員制となりました。

現在も「中学受験生のバイブル」として全国の小学生に支持されている独自の教材『予習シリーズ』は、1960（昭和35）年から販売を開始しました。


懐かしい中野校舎と、昭和48年ごろの「合不合判定テスト」の合否判定表。

今回誌面でご紹介した「合不合判定テスト」のスタートは1973（昭和48）年のこと。その後、1981（昭和56）年から「合不合判定テスト」資料のコンピューター処理が始まり、今に至っています。

現在、四谷大塚のネットワークは首都圏の直営校舎17校だけでなく、全国の四谷大塚NETの加盟塾に広がっています。しかし、「社会に役立つ人財を育成する」という設立当初の理念は、54年たった今も変わりません。未来のリーダーを育てるために、四谷大塚の進化はまだまだ続きます。

専任の講師らによって編まれる『予習シリーズ』は、改訂を重ねて、発行から48年。他塾に通う生徒たちも購入して利用することができる。